2023, 4 月 30 日オープンミーティングの報告

●2023.4.30.(日）15:00-16:30
●zoom
●参加費　無料
●発表者
　丸野萌子　平塚市立小学校教諭
●テーマ「P4C の第一歩～誰でも P4C に挑戦できるアイテムや方法を考えてみました～」
●内容　学校で哲学対話を始めてから、私はより空間作りに力を入れるようになりました。学校には必ずしも対話に積極的な子が参加しているとは限りません。そこで、低学年を担任していた私は学生時代の経験も活かしながら対話の空間に自然と参加できる場作りに役立つグッズを考え、今回発表します。ぜひ、p4c に興味がある学生さんから、学校でやってみようかなと考えている先生方に参加していただきたいです。

参加者　一般参加 19 名、運営委員 6 名　計 25 名

発表要旨

初任校で哲学対話をやってみた
　小学校低学年担任の実践報告と子どもの変化

大学のゼミにて
立教大学の河野ゼミに入るまでは、P4C のことは知らなかった。
　P4C に関わっている人たちが柔軟、安心感があって、P4C についてもっと学んでいきたいなと思った。
　河野ゼミの真剣さ、食の豪快さに魅了

勤務校
　大規模校の 3 年生を担任。全 6 クラス。
　採用された時に、P4C をしたいと伝えた。1 年間、自由に P4C をすることができた。

私にとっての P4C
　P4C は自己決定のための手段となった。
　P4C は他者との対話であるだけでなく、自分との対話であった。
　P4C によって色々な人と意見を共有するのは素敵
　実はみんな哲学者。色々な場面で色々な人が深い話をしている。

対話の場の設定とその反省・分析は大切

学校で P4C をやる意味

何でも検索できる時代になったが、人の心は検索できない、調べてわかるものではない。

価値観も、家庭環境も違う中でやる意義

そんなことは分かっているという正論の一歩先に進ものが P4C。正論であっても、様々な環境の元にある人にとっては、それは最適解ではない。P4C のケア的思考が大切になる。

対話の流れ

ルールの確認

「真の愛は待つ」(河野)

コミュニティボールを持っている人が話す

話しを最後まで聴く

他の人の意見を否定したり、笑ったりしてはいけません

考えが変わってもいい

あなたの〈何で〉を大切にする

ツール

質問ツール

グループ分けカード（動物マークは 5 人一組、数字は 6 人一組、星）

振り返りアイコン

対話を深める質問をしました

よくきき考えることができた

安心して話すことができた

対話への参加度を促すために、丸い画用紙に自分の似顔絵のアイコンと名前を書いてもらい、そのアイコンを振り返りアイコンに置いてもらう。子どもに自己評価してもらう。

P4C のユニバーサルデザインがあり、ダウン症の子どもも参加してもらい、意思表示カードとして振り返りアイコンを作った

板書（試行錯誤中）

板書はできる限り子どもの発言をそのまま書くようにしている。

子どもたちが質問カードをどのくらい使っているかを知りたいということで、記録のための板書をする

振り返りノート。学年で使っているものを使い、工夫をしている

1 ページ目を半分に折り、

上半分を今日のテーマと配所の意見

下半分を最後の振り返りとする
振り返りを家に持って帰って、家族との話し合いや、友だちとの対話を記録してきてもいい。半数以上の子が家に持ち帰ったり、下校時に友だちと話したりしたことを書いてくる
（子どもの反応が素晴らしい）

子どもの変化
質問の仕方が変わった。他の授業でもこれが見られる
言葉へのこだわり。特に国語の授業が盛り上がるようになった。作文にも変化が出てきた
静寂の時間というのに慣れてきている。特に待つという態勢ができている
昨年度からの持ち上がり児童の振り返りノート
「知っていることを話す時間ではなく、友達の話と自分のことを比べながら話したほうが面白くなるって思いました。」
対話が盛り上がる、盛り上がらない、の感覚をもち始め、対話を俯瞰して評価するようになっているのには驚いた。

対話の人数：これはどの程度が適切なのかは皆さんの意見を聴きたい

盛り上がるテーマ、盛り上がらないテーマ
自分としては自然や愛国心に関するテーマなどはどういうふうにしたらいいか

質疑応答（Q＆A）、感想・コメント（C）

C：丸野先生の小学校の実際の授業を見てみたい。
C：ユニバーサルデザインというのが面白い。

学年ごとの児童像について

Q：去年は 6 年生と対話をしたが、今年は 2 年生でしていて、対話の難しさを感じている。2 年生として 1 年間の対話をしてどう変わっていって欲しいか、そういう児童像みたいなものはありますか。

A：児童像に関してですが、P4C をしていても、学年ごとのゴールというのがあるのかもしてない。去年 1 年間で思ったことは、黙って静かに人の話を聞くということをゴールとしました。

ファシリテーターのあり方について

Q：子どもたちは言いたい、言いたいという態度を示し、それを教師として押さえてしまうということがあった。どういう点でこのような事態に対処していますか。

A：最初の時に P4C の説明をした時、子どもは P4C を授業というよりもイベントとして受け取った。輪になって座ると互いの顔が見えるし、教師もそこに入って、話しをするときには手を挙げて、コミュニティボールを回してもらうということで、子どもに受け入れてもらう。子どもたちが、今日はイベントだよねって色々準備をしてくれる。しゃべらないということが、イベントの一つルールで、遊び感覚として受け入れてもらう。
Q：最初の取り組むファシリテーターが失敗しがちなこと、苦戦しがちなことなどはありませんか。
A：問いを作るのはなかなか難しい。子どもたちが話し合いたいという問いを作る、道徳で言えば、それが内容項目にあっているかどうか、というように、どのように問い作りをするかということ。対話しているときに、話が逸れているなっていう感覚や、盛り上がっていないなという感覚、同党巡りになっているような質問の仕方や答え方のときに、話しを切るやり方、軌道修正のやり方、そういうことがなかなか苦戦するところ。対話は流動的なので、このような事態に対処するのが難しい。ファシリテーターがしゃべり過ぎないということ。
C：子どもは前の文化から次の文化へと移行している状況ではないか。そういう時には、言葉がスムーズには聞くことも話すこともできない。漢字を覚えていくということも同じ状況ではないか。引っかからないのが不思議。ファシリテーターは乞食ではないか。何かを恵んでくれるまで待ち続ける。子どもからも真理を求める。ファシリテーターこそが一番何も知らず、一番真理を欲しているという態度を示せば、方法がどうあれ、やり方がどうであれ、感情的に怒ったりしても、問題はないのではないか。

P4C を実践してみて

C：去年の冬に P4C をしました。対象は中学校 3 年生。11 名のクラス。それでも、クラスには自分の居場所はないと思っていたり、廊下に飛び出してしまったりする生徒がおり、中学生の間は友達を作る気もないし、高校に行ったら自分らしい世界を作るということをつぶやく生徒もいて、どうにかしたいなと思っていた。輪になって、コミュニティボールを持っている子だけが話す、話している子にみんなが耳を傾ける、そして話をつないでいくというやり取りが素敵で、輪になって顔を見ながら話す機会を作ってあげたいと思って実施した。そしたら、本当に、全くテクニックも何も知らない私の道徳の授業であったが、それを続けてやってみた。すると、輪になったとき次はだれが隣になるのかなと楽しみにしてくれたり、寡黙だった子の話を聞いたりして、振り返りシートには、印象的だった人の意見として、寡黙だった子の意見がよく挙がってきた。次の時間に挙がってきた意見を紹介してやると、生徒の表情が和らいだというような素敵な体験ができた。卒業する子どもたちが 3 月に 3 時間だけ自由な時間を与えられて、過ごせるということがあるが、何をすると投げかけたら、最後の学活の時間には、対話をしたい、話し合いたいと言ってきた。すると、自分のブラックだった歴史を、この時間だったら安心して話せるということで、

話しをしてくれる生徒も出てきた。P4C とは何か、よく分からなかったが、やってみてよかったなーと思った。

P4C を実施する時の雰囲気

C：今のお話を聞いて、教師が作る雰囲気が大切だと感じた。

Q：雰囲気を作るのが大切だとどうしてそう思ったんですか。

A：何を言っても許してくれるだろうなという安心感。一緒に参加してくれているという感覚。大きな反応をしなくてもいいと思うが、共感してくれているなっていう態度があるということはすごくうれしいことだと思う。声のトーンや話す速さや、いつもと違うという環境の変化などは自分なりに意識している。

Q：1 年生を担任しているのですが、1 年生の雰囲気づくりに助言はありませんか。

A：P4C の時間はいつもと違うという感覚を作ることを大切にしている。やはり、輪になって座るということ、普段の授業とは違って、飲み物を足元において飲んでもいいよといったカフェの雰囲気を作ったりしている。普段だったら、子どもたちができないようなことをしてもいいというような安心空間を作る。しかし、特別感、イベント感というものも、時間が経つうちに当たり前のものになっていくのであって、最後までイベント感であるわけではない。

C：毎日、朝の読書タイムでサークルを作って本を読み、朝の挨拶をして、サークルで対話するという時間を 15 分くらい作っている。これから、特活や道徳の時間で P4C を実施していこうと考えている。

Q：教室の雰囲気作りに関して、今後考えているようなことはありますか。

A：雰囲気を普段とはがらりと違ったものにするつもりはありませんが、落ち着いたものにしたいとは思っている。

道徳の内容項目について

Q：道徳の内容項目を今後どのように扱っていくのですか。道徳を P4C でやるということの難しさはないのだろうか。

A：これからは、やさしさ、親切というところ。子どもたちも選びそうだなというところを選んでいこうとは思っていますが、内容項目の問題は複合的なものだと思う。やはり難しいですね。

C：対話していて、内容項目が変わっていくようなことがある。そちらの方が盛り上がるというようなことも考えられる。しかし、テキストのねらいとは離れていくというようなコメントがつくような場合もあり得る。

A：道徳科の求めているゴールというか、目指す子ども像というものがあるので、そこへのプロセスとしての内容項目であると思うので、ゴールを明確に持っていたら、方法を大きく間違えることはないのではないか。

C：一つの価値から他の価値を関連して考えるというのは、今は一般的になっている。

質問カードなどのツールを使ってみて

Q：質問カードやトランプなどを使っていて、子どもたちがどんな反応を見せているかを教えてください。

A：質問カードは輪の真中に於いていておくと、子どもたちも質問の仕方は大切だということが分っていて、質問カードをちらちら見ながら、仕えるカードを、その場面に応じて使うようになっている。教師の方から今この質問を使うといいよというようなサジェスチョンはしていない。質問の仕方を知らないということもあるので、質問カードを置いておくと有効である。

哲学対話の評価について

Q：哲学対話の評価をどうしているのか教えてください。

A：所見に書ききれないほど、子どもの発言は豊かであるが、学校での評価の形式は決まっていて、書ききることはできない。子どもに還元されるような評価にはなっていない。自分で作ったノートなどでフィードバックはしている。

哲学対話する時のクラスの人数について

Q：人数にこだわるような発言があったと思いますが、どうして人数にこだわるのですか。

A：いきなりみんなの前で発言するのが難しい子は一定数居るのかなと思っていて、自分の考えを人に言って良いものなのかどうか、ということは緊張するポイントだと思う。お互いの意見を確認したうえで、全体での発表をするということと、いきなり質問されるのとは、発言のハードルはかなり変わると感じる。そこで、小規模の中で発言をして、自分の価値を確かめて、その上で、全体でも発言してみようと思うのはハードルを低くすることだと思う。色々な子がいるという観点と発言のハードルを下げるという意味で、小規模から少しずつ人数を多くしていく。

丸野先生の最後のコメント

発言する以上にどうやって聞いたらいいかという自分の問題。

人と話している話し方を自分の中でもしていた。人に話すように自分にも聴いていた。

自分の中のもやもやを解いていくには、人に聴〈訊〉かなければいけない。人に対して訊くときに、その訊き方によって話の展開が変わっていくように、自分にどう訊くかが大事。訊き方を知らないと自分のよさも自分の今後のあり方も分からない

このコメントに対するコメント

和になって座る P4C とは違う P4C の展開の可能性。

P4C は自己解放だという学生の反応。対話が自己対話になっているのかなということ。